

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）
分担研究報告書

第2回 Stevens-Johnson 症候群ならびに中毒性表皮壊死症の全国調査

分担研究者 高知大学医学部小児思春期医学講座 教授 藤枝幹也
研究協力者 同上 助教 石原正行
同上 同上 助教 玉城 渉

研究要旨 Stevens-Johnson 症候群ならびに中毒性表皮壊死症は、急性期治療終了後も腎機能障害など後遺症が残る事例もあり、その実態を検討した。腎機能検査を行っている 267 例中、腎機能異常を認めた例は 63 例 (23.6%) で、慢性期 (発症から中央値 98 日後の採血) に腎機能障害を示すと発症から 1 年後の生存率が有意 ($P=0.0266$) に低かった。新規血液透析導入は 12 例にみられ、うち死亡例は 7 例に認められ、死因は敗血症、多臓器不全、汎血球減少が複数例みられた。以上、経過中の腎機能障害併存は、生存率を低下させることが観察された。

A. 研究目的

Stevens-Johnson 症候群ならびに中毒性表皮壊死症の全国調査に対して後遺症としての腎機能障害の頻度、腎機能障害例の生存率や死因について調査を行う。

B. 研究方法

2020 年に藤枝の他、済生会横浜市東部病院小児肝臓消化器部長 乾あやの (肝臓) および京都府立医科大学呼吸器内科講師 金子美子 (呼吸器) と協議の上、3 次調査臓器合併症調査票を作成し、第 2 回全国調査の 2 次調査全症例を対象とし、対象施設 160 施設 508 症例に 2021 年 3 月に発送し、408 例から回答を得た。藤枝らは腎機能検査異常を中心に解析した。なお、3 次調査内容については、分担研究者の金子美子の報告書を参照いただきたい。

(倫理面への配慮)

情報から得られたデータのみを匿名で、分担研究者および責任研究者の責任の下、保存した。廃棄する場合は、紙媒体はシュレーダーを用いて廃棄し、電子データはデータを完全に消去した。

C. 研究結果

症例報告書が提出された 408 例のうち、適格症例は 392 例であった。経過中、腎機能検査を行っている 267 例であり、腎機能検査異常例は 63 例 (23.6%) に認められた。

慢性期 (発症から中央値 98 日後の採血) に腎機能障害を示すと発症から 1 年後の生存率が有意 ($P=0.0266$) に低かった。新規血液透析 (HD) 導入は 12 例 (4.5%) で、死亡例は 7 例にみられ、発症から死亡までの日数中央値は 18 日 (11~174 日) であった。死因 (重複あり) は、敗血症 5 例、多臓器不全 3 例、汎血球減少 2 例、および慢性 B 型肝炎急性増悪、ARDS、多発脳出血が各 1 例であった。

D. 考察

経過中、腎機能検査異常が約 1/4 (23.6%) に認められ、慢性期に腎機能障害を伴う例では発症から 1 年後の生存率が有意に低下することが観察された。新規 HD 導入例は 4.5% にみられ、うち死亡例は発症から死亡までが短期間で死因は敗血症や多臓器不全であり、発症早期に腎機能障害を認める例では、予後不良となる症例が観察された。

E. 結論

経過中の腎機能障害合併は、生命予後悪化させる

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

なし